

第3章 実践事例報告

- 1 網走市（オホーツク管内）
- 2 伊達市（胆振管内）

第3章 実践事例報告

1 網走市（オホーツク管内）

網走市は、北海道の東部に位置し、オホーツク海に面している。丘陵地が多く、市街地は網走川河口付近とその南側に続く海岸段丘上の平地にある。北西部に能取湖、中部に網走湖、東部に濤沸湖があり、内陸部は森や農村地帯が広がり、市域は「網走国定公園」の一部となっている。

令和4年12月末現在の人口は33,444人で、高齢人口率（65歳以上）は32.9%である。本道においては、全国を上回る速さで少子高齢化や人口減少が進み、様々な課題が山積する中、地域が持つ教育機能を活かし、より多くの住民の主体的な参加を得られるような取組の工夫が一層必要となっている。

（1）実施目的

子ども向けイベントを企画したい又はボランティアとして参加したいという市民を対象に、子ども向けイベントについての学習や事業企画等について学ぶ機会を設け、参加者同士の連携を深め、目的をもった市民活動団体の組織化を通じて、コミュニティの活性化や市民活動の推進を図る。

（2）実施主体

網走市市民環境部市民活動推進課

（3）実施概要

講座名 子どもイベントキャラバン養成講座

ア 第1回（資料3-1）

実施日時	令和2年8月30日（日）10時00分～12時00分
会場	西コミュニティセンター 集会室
参加者	網走市民31名
講師	（一社）とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏
学習プログラム	○ 「まちの活性化と子ども事業」をテーマに、地域の現状や「子どもでつながる地域づくり」、「担い手育成としての子どもの体験事業」についての実践事例の紹介 ○ 「子どもイベントキャラバン」実施に向けた活動の進め方や参加者間の連携、活動の継続に向けた工夫についてのアドバイス

イ 第2回（資料3-2）

実施日時	令和2年10月25日（日）10時00分～12時20分
会場	西コミュニティセンター 大集会室

参加者	網走市民 28 名
講師	(一社)とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏
学習プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加団体及び個人による自己紹介と活動内容の紹介 ○ グループワーク①：団体に関わらず 5～6 名のグループに分かれて課題解決型ワーク（おもしろ村） ○ グループワーク②：子どもイベントキャラバンを実施するとしたらどのような役割やスケジュール感が必要となるかを「事務局」「時期」「対象」「方法」「調整」の 5 グループに分かれて協議・発表

ウ 第 3 回（資料 3-3）

実施日時	令和 3 年 2 月 21 日（日）10 時 00 分～12 時 00 分
会場	向陽ヶ丘住民センター 多目的ホール
参加者	網走市民 26 名
講師	(一社)とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏 ※新型コロナウイルス感染防止のためオンラインによる講義
学習プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ○ 付箋を用いて「講座に参加した理由」「網走の子ども達に足りないものは何か」を各自記入し、キーワードを抽出。キーワードは事業実施時の事業目的となる。次に事業展開方法について、ブース方式によるイベント展開イメージを共有 ○ 実際にブース参加するメンバーごとにグループになり、どのようなブースを設置するか、スタッフ数、必要経費等を検討し発表。また、日時・場所、役割分担について全体で話し合いを行い決定 ○ 最後に講師より本講座の全体総括と次年度事業実施に向けたアドバイス

(4) 事後調査

ア 参加者

事業終了後、参加者を対象に、アンケート調査を実施し、以下の回答を得た。(n=22)

1 参加の動機について

項目	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	未回答
まちのために活動したいと考えたから	13	8			1
仲間がほしかったから	5	7	5		5
周囲に誘われた・勧められたから	6	7	1	5	3
何かしたいと思ったから	8	8	2		4

2 地方創生塾を通して、「身についた」「向上した」「新たな気付きがあった」ことについて

項目	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	未回答
自分の考えを的確に相手に伝えること	3	9	2	3	5

新たな人間関係をつくること	5	11	2	1	3
まちのことを考えること	10	7	2	1	2
まちのために活動する意欲	11	6	2	1	2
まちをより好きになったこと	3	11	2	1	5

3 今後の活動について

項目	思う	思わない	無回答
今後、この講座での学びを生かし、まちのために活動したいと思いますか	20		2

4 「思う」と回答した方は、どのようなことをしてみたいですか

- ・ 地域防災、減災活動
- ・ 同じ思いの人と協調したいと思う
- ・ コミュニティの向上
- ・ 網走はコンパクトに何でも揃っている街なのに、駒場付近の全国チェーンの企業ばかりが栄えて、中心の商店街が淋しい状況
- ・ もっと地元企業と市民とで暮らしやすい、子育てしやすい魅力的なまちづくりをしたい
- ・ 子どもたちのために活動したい
- ・ 子供の笑顔のためになにかできればいいなと思います。こういう活動って楽しいよと関わったことのない大人たちに知って欲しい
- ・ 自分のしている活動（森のようちえん）とコラボして行えるものやってみたい。例えば、絵本劇を森の中でやっていただけたら、楽しいし子どもたちの学びになると思う
- ・ 今まで行ってきたことを生かしたい

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。

1 今年度のプログラム全体（講座の回数も含む）について
<p>講座回数は年3回とし、<u>全国の事例や事業企画方法を学び、具体的にイベント実施に向けた話し合いに進めたため全体の流れや回数は適当だったと考えます。</u></p> <p>申込者の約8割が全3回出席しており、最終回でとったアンケート結果でも内容についてよかったと答えた方が約8割と好評であり、<u>参加者にとっても無理なく出席できる回数、内容だったと思われます。</u></p>
2 学習者（参加者）間の関係づくり（コミュニケーションスキルの向上等）について
<p><u>多様な職種、経験を持つ方が参加することで異業種交流が図られました。</u></p> <p>また、普段から市民活動やボランティアなどの活動に親しんでいる方やこれから始めたい方など活動への取り組み状況もさまざまな方が集まることで<u>お互いに刺激</u>を与えることができたと思います。</p>
3 他機関・団体等との連携について
<p>他機関・団体等との連携は行いませんでした。</p>

4 本事業を通じた地域活性化について
今回学んだことを活かし、 <u>新たな活動を始めることや、講座でできたつながりの中で地域活動に興味を持つ方が増えることが今後の地域活性化につながると考えます。</u>
5 地方創生塾に参加して良かったことについて
<u>新型コロナウイルスの影響からグループワークの方法や講師との対話がオンラインになるなど既存の講座方法からの変化もあり、講師や参加者にご不便をおかけする点もありましたが、それぞれがやりたいことをイベントという形にする方法を学ぶ場を提供できたことがよかったです。</u>

(5) 成果と課題

ア 成果

子ども向けイベントを企画したい又はボランティアとして参加したいという市民が多数集まり、全国の事例や事業の企画方法を具体的に学ぶことで、コミュニティの活性化や市民活動の推進を図る人材育成が果たせた。

イ 課題

参加者同士の連携や目的の共有を深めるための時間が短かったため、今後はより連携を深め、集まった市民自らが目的に沿った活動を自分の力で行えるような働きかけが課題である。

「ほっかいどう学」地方創生塾（網走市）

2年目 第1回

日 時	令和2年8月30日（月） 10時～12時
会 場	網走市西コミュニティセンター
参加者	31名
内 容	子どもイベントキャラバンサポーター養成講座 「全国の子どもイベントの事例学習」

今年度の地方創生塾は、「子どもイベントの企画と参加の仕方を学び、コミュニティセンターなどを会場とした子どもイベントキャラバンの実践を目指す」ことを目的に、来年2月まで計3回実施します。西コミュニティセンターを会場にした第1回創生塾には、31名の網走市民が集まりました。

昨年度に続き、一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事の廣瀬 隆人 氏を塾長に迎え、「まちの活性化と子ども事業」をテーマに、「地域の現状」や子どもが福祉委員として、高齢者の買い物に付き添いボランティアとして関わるなどの「子どもでつながる地域づくり」をする事例、栃木県鹿沼市の子どもたちが「ミニかぬま」という子どものまちをつくり、店を構えて物を売買したり「子どものまち」の市長選挙を行ったりするなど、まちづくりから住民自治や社会の仕組みを学ぶ「担い手育成としての子どもの体験事業」を参加者に分かりやすく紹介いただきました。

講演終盤には、廣瀬塾長から来年度網走市で新たに活動する「子どもイベントキャラバン」実施に向けて、活動の進め方や参加者間の連携、活動の継続などの工夫について、アドバイスいただき終了しました。

次回は、10月25日（日）南コミュニティセンターで開催します。

成果と課題

定員を超える申込みがあり、講座の趣旨に賛同する市民が多く集まりました。

第1回目講座は、講師から全国の事例を紹介いただく講義形式だったこともあり、参加者同士の交流を図るまでには至っていないため、今後の講座を通じて横の連携を深めることが課題となります。



【コロナウイルス感染症拡大防止対策した研修】



【写真や動画を活用しながら説明する廣瀬塾長】

「ほっかいどう学」地方創生塾（網走市）

2年目 第2回

日 時 令和2年 10月 25日（日） 10時～12時

会 場 網走市南コミュニティセンター

参加者 28名

内 容 子どもイベントキャラバンサポーター養成講座

「子どもイベントキャラバン実施に向けた組織づくり」

2回目の地方創生塾は、28名の市民が参加して、子どもイベントキャラバンに参加を希望する個人や団体の活動紹介とグループワークを行いました。

前回同様、塾長の廣瀬隆人氏から子どもイベントキャラバンの目指す姿や来年度の活動実施に向けた説明がありました。その後、今回集った個人や団体が現在活動していること、これからキャラバンの一員としてできることを参加者全体に紹介しました。

【紹介された個人や団体の活動内容(例)】

- ・音楽を取り入れた読み聞かせ
- ・創作体験（凧づくりや竹とんぼ、折り紙など）
- ・科学実験
- ・健康教室（遊びながら体の仕組みを学ぶ）
- ・動物と触れ合う場づくり など(19の個人や団体)

講座後半では、ゲームを通して話を聞く姿勢や会話をうまく繋げて課題を解決する大切さに気付くことを目的に、様々な個人や団体が6つのグループに分かれて課題解決型のグループワークをしました。その後、来年度子どもイベントキャラバンを実施するとしたらどのような役割やスケジュール感が必要かを「事務局」「時期」「対象」「方法」「調整」の5グループに分かれて、実施期日や参加対象などを話し合い、最後に全体で方向性を決める、という一つのイベントを実施するための一連の流れについてシミュレーションをしました。



成果と課題

今回は、自己紹介やワークの時間を取ったことで、参加者同士のコミュニケーションを図ることができました。また、イベントを実際に行う上で必要な役割に分かれて、実施を想定したシミュレーションをすることで、実践的な学習ができました。

次回、この講座を経て集った有志が自主的にイベントキャラバンに向けて、改めて具体的な計画を立て実行するという参加者全員で共有できるようにしたいと考えています。

「ほっかいどう学」地方創生塾（網走市）

2年目 第3回

日 時	令和3年2月21日（日） 10時～12時
会 場	網走市向陽ヶ丘住民センター
参加者	26名
内 容	子どもイベントキャラバンサポーター養成講座 「子どもイベントキャラバン実施に向けた企画」

3回目の地方創生塾は、廣瀬塾長とWebアプリケーションでつないだ開催となりました。次年度の子どもイベントキャラバンの実現に向けて、参加者間で事業の目的を共有し、具体的な役割分担や開催時期等について話し合いました。

まず、塾長からこれまでの取組の振り返りや今後の事業展開について事例を交えながら概要を説明しました。

その後、来年度参加者が協働して企画・運営するために必要な事業の目的を共有しました。塾長からグループワークの手順説明があった後、前回の講座でイベントキャラバン事務局となった参加者が、司会、書記を務めてグループワークを進行しました。「講座に参加した理由」、「網走の子ども達に足りないものは何か」を参加者各自が付箋に書いたものを全体共有し、キーワードを抽出しました。その中には、「子どもが普段できない体験」「異業種のつながり」といったキーワードが挙がりました。

後半は、ブース方式によるイベントの展開イメージを共有しました。参加するメンバーごとに分かれて、どのようなブースを設置するか、必要なスタッフ数、経費、そしてステージ発表の可否等を検討し発表しました。また、ボランティアとして事業に参加したい方については、どのような関わり方ができるか発表しました。

最後には、来年度の日程や実施会場、「企画・会計班」「広報・宣伝班」「会場・コロナ対策班」などの役割分担を決定しました。塾長から、今年度の総括と次年度開催に向けたアドバイスをいただいて終了しました。

成果と課題

「子どもイベントキャラバン」実施に向けた具体的な事業展開や役割分担、日程等が決められました。参加者の事後アンケートには、講座内容について「とてもよかった」「よかった」と答えた方が80%を超えており、また「勉強になった」や「学んだことを生かしたい」という感想があり、参加者のこれからの活動の一助になったと思います。

講師による概要説明



グループワーク



2 伊達市（胆振管内）

伊達市は、北海道の道央地方南部に位置し、四季を通じて温暖な気候である。2006年3月、旧大滝村との合併により四季折々の美しい癒しの里として定評がある温泉郷「大滝区」が加わった。伊達市の開拓は、1870年に、仙台藩一門互理領主の伊達邦成とその家臣による集団移住という他に類を見ない形態で行われ、北海道ではとりわけ古い歴史と伝統文化を有している。

大滝区は有珠山から約32キロに位置しており、これまでの噴火の経緯からは「降灰、空が暗くなる」等以外の直接的な大きな被害は想定されていません。地盤も強固な岩盤でできており、地震にも強い地域と言われている。また、札幌から約2時間、新千歳空港から約1時間の位置にあり、有珠山噴火時に訪れるであろうボランティア等が有珠山周辺の壮瞥町、伊達市、洞爺湖町へと向かう際の通過地点である。多くの支援物資も同じく札幌や千歳方面から被災地へと向かう事が予想されるため、大滝はボランティアスタッフや支援物資のハブ拠点となりうる可能性を秘めていると言える。

令和4年12月末現在の人口は32,391人で、高齢人口率（65歳以上）は37.9%である。今後団塊の世代（1947年～1949年生まれ）が後期高齢者となる2025年には、75歳以上の高齢者の増加がさらに進むと予想されている。

（1）実施目的

新たな学校の開校を契機に、地域の活気づくりやネットワークの再構築に資する活性化プランづくりを行い、自ら地域課題の解決に取り組む人材の育成を目指す。

（2）実施主体

伊達市大滝区おおたき新聞くらぶ

（3）実施概要

ア 第1回（資料3-4）

実施日時	令和2年7月6日（月）19時30分～21時00分
会場	オンライン
参加者	伊達市民7名
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログラム	テーマ「有珠山が噴火した際（災害時）、大滝の住民ができる役割について」 ○ 有珠山噴火時の体験を各メンバーから聞き取り、想定される被害内容について確認

イ 第2回（資料3-5）

実施日時	令和2年9月5日（土）14時00分～16時00分
会場	TOYA CAFE

参加者	伊達市民 10 名
講師	火山マイスター 長友 加也 氏
学習プログラム	テーマ「有珠山噴火時の状況と避難場所としての大滝の役割について」 ○ 講師によるテーマに沿った講話

ウ 第3回 (資料3-6)

実施日時	令和2年10月12日(月) 19時00分～21時00分
会場	優徳集会所
参加者	伊達市民 6 名
講師	なし
学習プログラム	テーマ「公民館研究集会北海道大会 in そうべつに参加して」 ○ 参加したメンバーからの報告と最終的な成果物のプレ作成について検討

エ 第4回 (資料3-7)

実施日時	令和2年11月30日(月) 18時30分～20時30分
会場	Web 会議システム (Zoom) による開催
参加者	伊達市民 8 名
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏
学習プログラム	テーマ「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きの構想 (プレ成果物) について」 ○ 構想の検討と講師からの講評や助言

オ 第5回

実施日時	令和3年1月5日(火) 19時30分～20時30分
会場	Web 会議システム (Zoom) による開催
参加者	伊達市民 3 名
講師	なし
学習プログラム	テーマ「2年間の活動報告会のあり方について」 ○ 次回の準備に係る打合せ

カ 第6回 (資料3-8)

実施日時	令和3年2月15日(月) 19時00分～20時30分
会場	YouTubeLIVE による開催 (3画面 Zoom との接続)
参加者	伊達市民 34 名 (動画再生回数 150 回以上 2月22日現在)
講師	NPO法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏

学習プログラム ラム	テーマ「災害時に助け合えるまちになるために」 ○ パネルディスカッション：たきしんくらぶの2年間の取り組みを講師と語る
---------------	--

(4) 事後調査

ア 参加者

事業終了後、参加者を対象に、アンケート調査を実施し、以下の回答を得た。(n=5)

1 参加の動機について

項目	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	未回答
まちのために活動したいと考えたから	4	1			
仲間がほしかったから	2	2		1	
周囲に誘われた・勧められたから	2	1	2		
何かしたいと思ったから	2	2		1	

2 地方創生塾を通して、「身についた」「向上した」「新たな気付きがあった」ことについて

項目	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	未回答
自分の考えを的確に相手に伝えること	2	2	1		
新たな人間関係をつくること	4	1			
まちのことを考えること	4	1			
まちのために活動する意欲	2	3			
まちをより好きになったこと	3	2			

3 今後の活動について

項目	思う	思わない	無回答
今後、この講座での学びを生かし、まちのために活動したいと思いますか	5		

4 「思う」と回答した方は、どのようなことをしてみたいですか

- ・防災について情報発信を続けたい
- ・エネルギー自給についてや草の根的な活動を続けていきたい
- ・実際の大滝区での避難についてのさまざまな課題を掘り下げていきたい
- ・移住者や移住希望者がこの地域のことをよくわかるようなデータやつながりを丁寧に作ってきたい
- ・人と人が出会い、繋がりを持てるような活動をしてみたい
- ・地域コミュニティを意識した事業展開

イ 事業担当者

事業終了後、事業担当者を対象に、記述式のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。

1 今年度のプログラム全体（講座の回数も含む）について
コロナの影響があり、残念ながら塾長が実際に大滝に来ていただくことが叶いませんでしたが、 <u>オンラインでの学びも予想以上に深く、最終的にはオンラインを使ってできたので、良かったです。回数も丁度良かったと思います。</u>
2 学習者（参加者）間の関係づくり（コミュニケーションスキルの向上等）について
オンラインに否定的だった参加者も、今回をきっかけに <u>オンラインの可能性に触れることができ、新たなコミュニケーションのスキルの向上に繋がった</u> と思います。少人数の団体ではありますが、資料や意見を出し合って1つのプロジェクトをやり遂げたのは、 <u>関係性をより強くする結果となった</u> と思います。
3 他機関・団体等との連携について
<u>他のNPOや行政、社協とのつながりがこの2年間をかけて（とくに終盤に）生まれたので、取り組みの成果を感じています。この繋がりを今後も途絶えずに連携を深めていけるようにしていきたい</u> と思っています。
4 本事業を通じた地域活性化について
この地域に必要なことを講師や担当者からの助言等で気付くことができました。地域の中だけでなんとかしようとするのではなく、 <u>いろいろな地域や人と繋がることでこの地域が活性化していく可能性が開けると知ったことが大きな成果です。</u>
5 地方創生塾に参加して良かったことについて
おおたき新聞くらの取組に <u>塾長や担当者に関わって、一緒に考えてくださったことが何よりも心強く、多くの気付きを得られたことに感謝</u> でいっぱいです。

(5) 成果と課題

ア 成果

コロナ感染症拡大により、人が集うことができない中でも「防災」をテーマに理解を深める記事をフリーペーパー「おおたき新聞」内に継続して掲載することを通して、住民に防災への意識を喚起しながら、情報を通じた「つながり」づくりができた。

また、公民館研究集会や他市町村での学びの場、オンラインでの報告会を通して、大滝内外の住民との繋がり の構築をすることができた。

イ 課題

大滝区内の地域住民の新たな人材の発掘や育成には、地域住民間の「顔が見える関係性」の構築と行政との連携が必要であった。「顔が見える関係性」の構築には上記の成果に記載したとおりであるが、ネットワークの再構築に資する活性化プランづくりには行政との連携・協働が必要であり、新たな人材の育成に繋げるプランの作成まで至らなかった。

今後、既存の組織を活用したネットワーク化を活用しながら、行政と連携して、人材の育成や地域の活性化を図る必要がある。

「ほっかいどう学」地方創生塾(伊達市大滝区)

2年目 第1回

日 時	令和2年7月6日(月) 19時30分～21時
会 場	オンライン形式
参加者	9名
内 容	テーマ「有珠山が噴火した際(災害時)、大滝の住民ができる役割について」

第1回ほっかいどう学地方創生塾(伊達市大滝区)は、コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンライン会議ツールを活用して実施した。参加者は、「たきしんくらぶ」メンバー7名のほか、NPO法人 ezorock 代表理事の草野 竹史 氏、北海道立生涯学習推進センター社会教育主事の田尾 和祐 氏がオンラインで参加した。

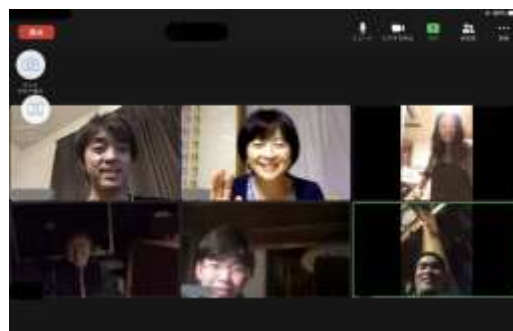
1時間30分にわたるオンライン会議では、前回の有珠山噴火時の体験を各メンバーから聞き取り、想定される被害内容について確認した。噴火後に移住してきた住民もいることから、住民を対象とした自然災害や避難方法について理解する学習の場をつくるのが大事であること、災害時には大滝の住民だけで対処するのではなく、近隣市町村などの団体と協働していくことが有効だということが、オンラインでの意見交流や草野塾長の助言から気付くことができた。

草野塾長をはじめ、様々な立場でオンライン研修に参加したメンバーから、大滝の立地条件にあった避難所運営や災害対応ができること、特に災害支援のハブ地点として、多くの可能性があるという提言もあり、災害時を想定して地域住民の防災意識を高める大切さを確認できた会議だった。

成果と課題

災害ボランティアの経験が豊富な草野塾長から他市町村や他団体の活動事例の情報を聴くことができ、これからの「たきしんくらぶ」としてできること、やるべきことなど活動の方向性が見えてきたことがよかった。

コロナウイルス感染症拡大防止の対策がとられている中、「たきしんくらぶ」メンバーや地域住民を一堂に会した取組ができないことに苦慮している。



【オンライン会議の様子】



【地域の活動をおたき新聞で情報提供】

「ほっかいどう学」地方創生塾（伊達市大滝区）

2年目 第2回

日 時	令和2年9月5日（土） 14時～16時
会 場	TOYA CAFE
参加者	10名
内 容	テーマ「有珠山噴火時の状況と避難場所としての大滝の役割について」

第2回ほっかいどう学地方創生塾（伊達市大滝区）は、会場を壮警町にある「TOYA CAFE」に移し、火山マイスターの長友 加也 氏からこれまで起きた有珠山噴火時の状況説明と避難場所としての大滝の役割についてお話しがありました。

1977～1978年までの噴火と2000年の噴火した際の有珠山の様子や周辺に住む住民の動きについて写真や資料を使って説明いただいた後、20年に1度の周期で噴火すると言われていた有珠山の災害について、大滝区の住民が避難場所のサポーターとして、避難者の困り事の対応など自分たちができるアイデアを出し合いました。

最後に長友氏から、火山マイスターは観光ガイドをするのではなく、各地域で住民の防災意識を高める取組を行う役割、災害前から学びの場を通して「地域住民をつなげる」役割があるので、たきしんくらぶのメンバーにも火山マイスターになってほしいとお願いがありました。参加したメンバーから、「壮警町が火山と共生しているということがわかりました。行政のできること、地域住民のできることに整理しておくことも、大切だと感じました」や「大滝住民として有珠山噴火を他人事とせず、いざという時に他の地域と助け合えるような関係性を築いていくことが大切ではないかと感じました」という感想が寄せられました。

成果と課題

「噴火に備えるにはまず噴火について知らなければならない」という気付きから始まった今回の学習会は、わかりやすい説明のおかげで有珠山についてより身近になりました。そして、実際に壮警町民の方と交流することで、大滝という枠を超えた災害対応のイメージを具体的に持つことができました。

課題としては、住民レベルの連携をどのように拡大していくか、また行政とどのような連携を実現させていくことができるか、今後は具体的な「備え」に対する学びの場などを持ち、災害対応力アップのための第2、第3の行動を起こして行くことが必要です。



【説明を聴きたきしんくらぶのメンバー】



「ほっかいどう学」地方創生塾（伊達市大滝区） 2年目 第3回

日 時	令和2年 10 月 12 日（月） 19 時～21 時
会 場	優徳集会所
参加者	6名
内 容	テーマ「北海道公民館大会 in そうべつ」の参加報告 と2年間の活動のまとめについて検討

第3回ほっかいどう学地方創生塾（伊達市大滝区）は、10月6～7日に壮瞥町で開催された北海道公民館大会の報告をしました。参加したメンバーから、たきしんくらの取組は、地域住民が楽しく学んで、主体的に地域の未来を創っていく活動であるが、実は「公民館運動」の動きに近いと感じたことを伝えました。また、基調講演、シンポジウム、分科会などから得た最新の情報を共有し、「おおたき新聞」の来月号の記事について検討しました。

また、2年間の活動のまとめ方を話し合い、「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きの構想のまとめ」を作ることにしました。その内容を検討するため、ブレーストーミング的手法を使って、いろいろな意見を出し合い、ホワイトボードにまとめました。

第2回の創生塾で学んだ気付きから、「水・暖・トイレ」が災害時に必要なキーワードということから、大滝の中にある資源や活用方法について洗い出しました。夏であればキャンプできる公園（子どもの遊具もあり）がいくつかあること、冬であれば「薪ストーブ」の使い方の説明や薪を提供できる人材がいることなどの情報が提供されました。また、湧き水があること、飲料でなくトイレを流すために使える水源などの確認、地域の人材や他地域との連携など、事前に情報共有することのほか、顔の見える関係性を築く必要があることを確認しました。

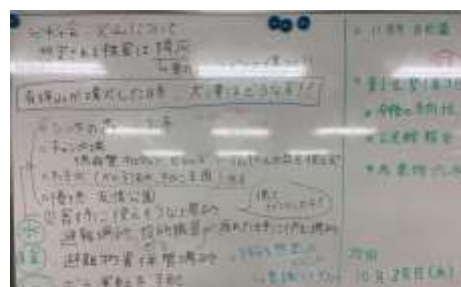
成果と課題

自分達の取組が「公民館運動」に近い活動をしていると認識できたことは大きな励みになりました。創生塾2年目の最終的なゴールも見据えることができ、自分達がたきしんくらぶとして、住民としてできることなどを自覚して残りの創生塾での学びを積み上げていこうというビジョンが持てました。

また、これまでも「おおたき新聞」で防災についての記事を掲載してきましたが、これからも少しずつアップデートした情報を掲載していきたいと思うので、より住民の知りたい内容や役に立つであろう情報をメンバーで吟味して取り組んでいく必要があると感じました。



【報告を聞いたたきしんくらのメンバー】



【ホワイトボードにまとめられた内容】

「ほっかいどう学」地方創生塾（伊達市大滝区） 2年目 第4回

日 時	令和2年 11 月 30 日（月）18 時 30 分～20 時 30 分
会 場	Web 会議システム（Zoom）による開催
参加者	8名
内 容	テーマ 「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きの構想について」

第4回ほっかいどう学地方創生塾（伊達市大滝区）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインによる開催となりました。

まず、たきしんくらぶが 2018 年 7 月から 2020 年 12 月までに発行した新聞の中から、防災に関する記事をもとにこれまでの活動を振り返りました。

その後、2年間の創生塾の取組を「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きについて」にまとめるため、草野塾長から提案で過去の噴火時の被害状況を改めて調べました。その結果、塾生から実際の被害やボランティアの人数等、数値化したデータの紹介があり、再度被害状況をイメージすることができました。その後も、大滝の資源として「大滝セミナーハウス」の活用の可能性やNPOとは何かということについて意見交流され、自分達ができることへの認識を深めることができました。また、災害のフェーズによる対応内容の違いや連絡手段の確保としてのコミュニケーションツールの重要性、大滝地区の中継ポイントとしての役割など、東日本大震災時の事例をもとに塾長から紹介がありました。

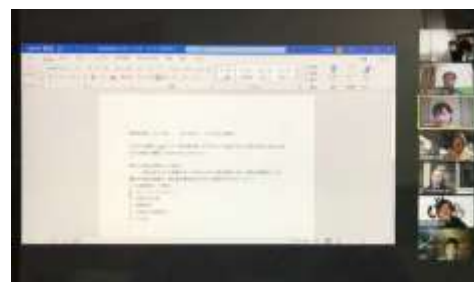
今回は、2年間の活動をまとめた「私達が考える災害が起きた時の大滝住民の動きについて」について最終確認する予定です。

成果と課題

「たきしんくらぶ」というフリーペーパー発行など地域で活動している団体が、防災について学び、災害時には支援活動もするということは他の地域でもあるようで、改めてこれまでの活動が人とのつながりを広げながら災害に備える活動になっていることに気がきました。草野塾長から、大滝という立地条件と環境が持つ可能性を成果物の中に盛り込むことや似ている事例（岩手県遠野市など）を調査していくことが、今後の取組になることを助言していただいたので、次回1月の第5回の会議までに防災構想をまとめていきたいと思えます。



【オンライン会議に参加した8名】



【報告を聞いたたきしんくらぶのメンバー】

「ほっかいどう学」地方創生塾（伊達市大滝区） 2年目 第6回

日 時	令和3年2月15日（月）19時00分～20時30分
会 場	YouTubeLIVE による開催（3画面 Zoom との接続）
参加者	34名（動画再生回数150回以上2月22日現在）
内 容	テーマ 「災害時に助け合えるまちになるために」 たきしんくらの2年間の取り組みをNPO法人 ezorock 草野竹史氏と語る

第6回ほっかいどう学地方創生塾（伊達市大滝区）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインによる公開イベント開催となりました。

まず、草野塾長からスピーカーであるたきしんくらぶ山城会長、事務局川田、メンバーで地域お越し協力隊の天野の紹介がありました。

その後、大滝の部分的な停電の影響で一時的に草野塾長からたきしんくらの発足についての説明が川田の代わりになされました。天野から「有珠山噴火時に大滝の地理的条件からできる役割、資源、可能性」についてのレポート共有がなされ、視聴者からのたくさんのリアルタイムのコメントも寄せられました。「普段のつながりがいざという時の力になる」という学びから2年間取り組んで来た大滝内外の関係性の構築と大滝ができる後方支援の可能性について報告しました。

草野氏から、たきしんくらぶや天野氏の新しいとりくみが今後地域の入り口的な役割を持ち、普段から人と人とをつなぐ拠点として大切だとの話がありました。今回最終回となりましたが、結果的に多くの人に学びの共有をすることができ、また大滝という地域について知っていただくこととなりました。

成果と課題

オンラインイベントにしたおかげで、伊達市街地をはじめ、広範囲からの参加申込を頂いたことは大きな成果でした。防災に熱心な活動をされている伊達市街地の方との出会いにも繋がり、冬期間や大雨時の移動の課題について検討する必要がある、という事に気づかされました。また、内閣府の出している「受援計画」も参考にするとよい、とのコメントもいただき、今後も学んでいくべき事が見えてきました。創生塾は終わっても、ここで学んだ多くのことをこれからも大滝のまちづくりに活かしていきたいと思えます。



【オンラインイベントのスピーカー4名】



【視聴している参加者からのコメント】